

2. 「学際力」をつける

2.1. 第16回日本赤十字看護学会 交流集会の企画運営

2015年6月27日～28日

日本赤十字看護大学

国内外の様々な災害について取材されているジャーナリスト・写真家キェルト・ドゥイツ先生、本学修士課程国際・災害看護学専攻の学生と共に、教員のサポートを得ながら、日本赤十字看護学会学術集会で「災害時にメディア関係者と看護師が抱えるジレンマ～報道の自由・個人情報保護・国民の知る権利の視点から共同の可能性を探る」という題名で交流セッションを企画・実施しました。

【学生の学び】

齋藤結香（2014年入学）

交流セッションの目的は、報道と災害看護の専門家が被災者の声を共有し、知識や経験、考え方を相互に交換することにより、メディア関係者と看護師の協働の可能性について検討する機会とすることでした。そこで話題提供者としてキェルト・ドゥイツ先生、指定発言者として日本赤十字看護大学 DNGLの池田稔子さん、日本赤十字看護大学 国際・災害看護学専攻の舎利倉幸香さんにお話をいただきました。

看護師の立場では、被災者や患者への倫理的配慮や個人情報の保護を考慮すると、情報の開示に対して悩むことがあると思います。私達は半年間、メディア関係者と看護師の協働についての話し合いを行い、当交流セッションを実施する中で、メディア関係者と看護師が協働できる可能性が見えはじめたと感じています。災害の状況や被災者のニーズを共有したい、そのために倫理観や価値観を理解し合うことが不可欠であり、その第一歩になったのではないかと思います。実際の交流会での進行の難しさを実感し、交流会の参加者のニーズを一番に考えるという自己の課題も発見するなど多くの学びを得ました。



2.2. 第 17 回日本災害看護学会 交流集会の企画運営

2015 年 8 月 9 日

宮城県仙台市

日本における災害看護の動向を知り、また交流集会を主催することにより、積極的に学会に参加し、学際力を養いました。

【学生の学び】

山内裕美（2015 年入学）

私たちは、初めて学会で交流集会を主催する機会を頂きました。交流集会のテーマは、大会のテーマである「東日本大震災からの教訓—経験から知の構築へ—」に基づき、「東日本大震災における支援は、その場・その人に役立つものだったのか?」としました。これは、医療チームが被災地で実施した支援と現地ニーズのずれについて議論し、そこから適切な医療・看護支援のあり方を考えたいと思ったからです。

当初は戸惑うこともありましたが、教員の指導のもと、他大学の DNGL メンバーと調整しながら、入念に事前準備を進めていきました。それでもいざ本番となると、不備な点が発覚し慌てる事もありました。しかし、DNGL の仲間の支えにより、無事終了することができたと思います。

交流集会には、私たちが想像した以上の方に参加いただき、活発な意見交換が行われました。場の空気を読みながら展開していくこと、また最後にまとめていくことは、容易ではありませんでした。緊張しましたが、仲間や参加者の方と共に場を作っていく感覚は、思い出しても感慨深いものがありました。

事前準備はもとより、テーマの決め方、話題提供者の選出や依頼方法などなど、全てにおいて学びの連続でした。



2.3. 9th Meeting of the Asia Pacific Emergency and Disaster Nursing Network (APEDNN) 参加

2015年9月21日～9月26日

フィリピン・マニラ

Asia Pacific Emergency and Disaster Nursing Network (APEDNN) は、アジア・太平洋地域において 2007 年に設立されたネットワークです。災害時やその他人々の緊急事態に取り組むため、現在は 40 ヶ国以上が加わり、保健、看護、助産の専門機関や人権組織、学界等からの約 270 人のメンバーによって構成されています。ネットワークのメンバーは 2007 年以来毎年、防災対策や災害対応、個人や地域の能力と復興力の構築に関する喫緊の課題について議論してきました。

【学生の学び】

小林千紘 (2015 年入学)

フィリピンのマニラで開催された APEDNN meeting に、日赤の DNGL1 年生は、インターンとして開催 2 日前の準備段階から参加しました。英語力が問われ、試され、鍛えられた事は勿論ですが、それ以上に、インターンという立場で参加した事で、これまでの学会参加や研修とは違う学びがありました。当然ながら全ての事柄が英語で進行する中、状況を理解し、自分達の立場・能力で出来る事を探し、行動に移すということ在必死になって行いました。この事で、単に会話というだけではないコミュニケーション力や状況判断力、目的を意識した行動の重要性を痛感しました。この経験が、今後国際力を身につけるための第一歩となったと感じています。

また、世界の保健や看護、人権機関に携わる方同士の議論を見聞きしたり、時には直接会話させていただいたりする機会も多くありました。アジア・太平洋と一言で括ってもその国々の状況や考え方、抱える hazard や risk は様々です。それら異なる状況の中、相互理解のために各国のメンバーが議論を重ね、今後の課題を見出そうとする過程を垣間見る事が出来ました。この事もまた、自分達が今後広い視野を得るための大きな学びとなりました。

